その用意の周到なるに敬服する。

本書の構成は、前記の如く現行民法に從つて、十個の章に分類し、各章の冒頭には、簡略に同章の概括的說明を先行せしめ、次ぎに實錄より拔萃せる資料の邦譯を記載し、その後にすべて逐一著者の見解を附加してゐる。資料は悉く出典を明かにして、例へば第一章の卷頭には、太宗第二十四卷十六枚表十四行、十二年九月庚子條（皇紀二千七十二年、西曆一千四百十二年）と記し、更に各章末には註を設けて、原典その儘を轉載してゐるなど、頗る懇切である。これらの事柄は、甚だ面倒であつて、多くは等閑視し勝ちであるから、著者の勞苦は實はねばならぬ。

唯本書は題名より見れば、朝鮮婚姻考といふのであるから、李朝治下の朝鮮民族の婚姻なる社會的現象に對して、彼等自身の歷史的性格より、今少しく精緻なる解明がなさるべき筈であるが、實際は然らず、資料の拾蒐に懸命して、その說明も附加的であり頗る輕いタッチで進行せられてゐる。特に全章の概括的總說とが要約はなく、從つて李朝婚姻法國有の法律的性格を把握することは困難であり、讀者は一々の資料について、斯かる事例も存在せりといふことを確認するのみであつて、總數三百六個の事例の來往の應接に苦しむであらう。

とはいへ、嘗て兩三年前に、朝鮮總督府中樞院より上梓せられた李朝實錄風俗關係資料撮要の如く、本書を資料集として見るならば李朝史或るひは朝鮮史の專攻者にとつて、又比較法制史の重要性に鑑みるとき、一般私法研究家にとつては、本書の價値はより高く評價せられるであらう。

最後に、著者が序文にて述べられしが如く、單に婚姻資料に止まらず、李朝實錄の民事法全般に涉つて、漸次整理せられ、李朝民法史を完成せらるゝ日の近からんことを期待して、蕪雜なる紹介を終る。（菊版三二四頁、定價四圓五十錢、昭十六年十二月、大同仰書館發行）〔岡本午一〕

プラトンの國家論

井上智勇著

文化統一體としてのヨーロッパが考へられる場合、クリスト敎と共に之が構成契機を形造るグリーヘントームは、氏族制度に始まるギリシヤ全史ではなく、クラシーク的ロゴス的ギリシヤに限定されねばならない事は既に自明の事柄に屬するであらう。まことに精神史上のクラシークたるプラトンの精神がプロチノス、アウグスチヌス、カント、シエリング、ヘエゲル等いやしくもヨーロッパの文化生活に對し內面的に且創造的に參與した總ての人々に流れを通じ、ヨーロッパ精神の源泉、—否一時代に限る靜止した泉ではなく—各時代を貫く潮流となつてゐると云ふ事實は今更縷述する迄もない事である。

從つて「プラトンは哲學者の獨占的對象ではなく、否それにもまして歷史家の對象でなければならなかつた。」然し事實に於て在來のプラトン研究は殆んど專ら哲學者によつて爲されて來、亦そ

の事の爲めに、プラトン研究のいと高き哲學的水準が形成せられ歴史家に難攻の障壁を爲してゐた事は否定し得ない。歴史家がプラトンを對象として取り上げる爲めには、その時代の歴史は申すもさらなり、一應も二應もの哲學的教養を兼ね備へる事が要求せられ、止むなく哲學者の活躍にまかさねばならなかつた所以でもあつた。今轉換期を親しく身に體驗する、古代史に造詣深き著者が止むに止まれぬ現代的關心から勇躍此の哲學的堅壘の擊破を企圖され首尾よくも成功を見た本書を手にしては、哲學者に對しかくの如き、歴史家の側から見たるプラトンの全く別な解釋の存する所以を誇示出來るだけでも、我々同學の者にとつて嬉しさの禁じ得ない事である。

著者は先ず「プラトンの生涯と國家の問題」なる章に於て、「プラトンにとつては、國家思想は思想の一部ではなく全體であつた」（三十二頁）所以を極めて手際よく述べてゐられるが、日進月歩の研究の精果が巧みに取り入れられた「プラトンの時代的背景なる」概説は著者のギリシヤ史に對する含蓄の程を遺憾なく明證して餘ある。

「プラトンの國家論の近代的解釋批判」に移つては、哲學者も一應問題にし、歴史家として特にプラトンを取り上げてゐるベールマンが俎上に奏せられてゐるが、古代に、言葉の近代的意味に於ける資本主義の非存在と、ベールマン的解釋そのものが既に時代の產物である次第が極めてローギッシュに轉開せられてゐるのであつて、本章こそは、若し直接にプラトンの原典に當り現在的立場からプラトンを以て現在の全體主義的理論の先驅者として援用せんとする者あらば正に之に對して止めを刺すものと云ふべきであらう。此の點理想國家の內容を傳へる第三章が本章の前に置かれたならば讀者にとり一層效果的となつたのではあるまいか。とまれ著者が專門の古代史のみならず近代資本主義の問題や歴史哲學に對しても最新の研究を實によく咀嚼され堂々たる卓見を有してゐられる事は洵に敬服に甚へない所である。

第四章の「希臘精神の發展とプラトン」に於ては希臘精神史上に於けるプラトンの限界性が說かれてゐるのであり、著者の說感々さえるを見るのである。最後の「イデア的國家の歴史的審判」に於てプラトンの國家論を以てして當時のギリシヤを救濟し得たか否かが當時の歴史的現實から審判されてゐるが、此の兩章の邊はクリスト敎、ヘレニズム、ローマ帝國と著者の最も特意とされる領域に涉る故その所說は斷然輝きを增し只紙數の少きを憾みとするのみである。

之を要するに本書こそは鋭い歴史的直感と優れたる良識、加ふるに新しい實證研究の精果を實によく取り入れた良心的な書物として高く評價されねばならないであらう。

本年度西洋史關係の傑作の一つとして江湖に推薦する次第である。（弘文堂發行、敎養文庫、定價五十錢）〔豐田〕

歷史的國家の理念

鈴木成高著

最近哲學界の顯著なる傾向と云へば、それは歷史哲學の興隆であるが、少なくとも哲學自體の學問的發展の歷史をたどるだけで此の流行現象の根ざす所愈々深く、單に一時的な現象として看過すべからざる重要性を持つものである事が了解されるのである。從つて我が國に於て、然も西田・田邊兩博士を中心とする京都學派の俊秀により、歷史哲學がその鋭き考察の對象となりつゝある事實は寔に當然の次第と云ふべきである。

或ひは國家の問題について或は歷史的世界について、歷史の理論、世界史、文化類型學等についての百花競姸とも云ふべき此の學界の隆昌は、獨り哲學界のみならず、我々歷史を考究するものにも多大の刺戟を與へられつゝある所であつて、史學界の爲めにも亦寔に喜びに堪へない事である。然しながら歷史的現實を體系的な理論で解明せんとする哲學と、具體的な事實學たる歷史學との間には、自ら越へ難いグレンツェが存し、最近の哲學界の精果、然も論理整然たる精果により啓發される所實に多大なるものあるにもかゝはらず、何としても歷史家として腹ふくるゝ業なる感を受けるは致し方のない事である。

所が中世史の權威にして「ランケと世界史學」以來旣に學界に定評ある著者が、つとに數種の雜誌を通じ、他近歷史家と云ふ立場に於て、哲學者に對し堂々その所說を主張し、蒙を開かんと努めてゐられたのであつて、我々同學の徒は大いに肩身を廣うしたのであつたが、今や此等の論文が相集められて一本を爲すに及び、愈々以て此の感を深うするのである。

「歷史的國家の理念」を讀んで我々は十九世紀的國家乃至は「單に政治機關としてではなく社會と文明の原理たらんとしてゐる」現代の國家が、國家の總てであり常態であるのではなく「歷史的國家に諸々の段階と原理と形體とが存する事」に深く思ひを致すべきであらう。次の「現代の轉換性と世界史の問題」は昨年の「理想」誌上に於て高山岩男氏と花々しき論戰を展開されたのであり記憶に新なる所である。「中世と現代」に移つては「政治の彼方」に宗教が求められ、自然經濟的色彩の漸く濃厚なる現代に生を受ける者にとつて、中世史研究に「十數年」捧げられた著者の言葉は切實であり、次の「進歩主義と歷史主義」と共に、歷史家として、轉換期現代の本質究明に對するひたむきの努力が身にしみるのである。最も平俗に書かれた「歷史と人格性」ですらその背後には、資本主義と個人性（紀元二千六百年記念史學論文集所收鈴木成高氏「資本主義起源の問題」八四二―八四七頁參照）なる立派な實證研究が存するのであつて、新しき政治史に對する深き反省を與へずには措かないであらう。最後に一見本書の內容には關はりの無い樣に思はれ、然も約半分の紙數を費された前半の大英帝國の分析も、依然問題となつてゐる世界史の理論に對する、歷史家としての肉迫であり、多少の問題は殘されてゐるにせよ、ランケ以來の此の大高所よりの展望は必ずや學界の反響を卷

き起こす事と思はれる。

とまれ本書は背後のエリュデシヨンの裏打ちを持つた程度の高いエッセイとして、亦ごくありふれた平明な言葉の連續にも不拘ひし〳〵と直接讀者の胸に通ずる新しい型の名文として、一般に讀まれ、廣く歴史的活眼の開かれん事を希んで止まない。（弘文堂發行、定價二圓三十錢）〔豐田〕

長壽吉博士還暦記念

西洋史論叢　政治と思想

本書は西洋近世史の一大權威として、多年本邦史學界に重きを爲された長壽吉博士が、華甲の壽を迎へられるに當り、博士の學德に報ゆる爲めに編輯された論文集であるが、此の種の論文集を世に送る事は實に我が邦西洋史學界にとり嚆矢の出來事であつて此の點斯學の發展を如實に示すものと云ひ得るであらう。

收める論文十六篇、學界の耆宿、長・大類兩博士はもとより、東京、京都、東北、九州、廣島とおよそ西洋史學の講座の存する大學の總てを盡し然も第一線に立つて指導的役割を演じてゐられる各權威が長博士の爲めに、その專攻の領域に於て健筆を振はれた事は正に壯觀と云ふ他はない。然し乍らその爲め却つて綱羅の弊に陷り、きのきいた本書の表題にいさゝかそぐはない感なきにしも非ずは致し力のない事である。

各篇執れも最高の水準を示す中にも別して原隨園博士の「エポスにみゆる希臘政治思想」、鈴木成高氏の「莊園の構造」、平塚博氏の「ペトラルカのモン・ヴアントウ登攀」、識井鐵男氏の「佛蘭西革命時亡命者の思想動向」等の珠玉の篇は、本年度學界の稔多き收獲として特筆されるべきものであらう。拙き紹介を終へるに當り長博士が今後も愈々碧鑽として斯道の爲めに御貢獻下ださらん事を祈つて止まない次第である。（東京富山房發行、定價六圓三十錢）〔豐田〕

東亞地政學序說

米倉二郎著

世界の天地をどよもして硝煙がたちこめてゐる。

混沌のうちよりあたらしきものの生れ出づる歴史の壯大なる序曲である。

亜細亜は今、新しき歴史の、新しき世界の創造者として吾々の前に在る。そして地理學も亦永い發展の歴史のうちに、あたらしき、眞の地理學が胚胎し、時代を新しく創り、而して新しき世界を政めてゆくものとして地政學が登場する。

米倉二郎教授著「東亞地政學序說」はまことに此のやうな秋に、永きにわたる眞摯なる研鑽努力の後に上梓せられたものである。

題して東亞地政學と言はれるが、もとより之は全世界の中核たる大東亞の地域を、日本地政學の指導理念に依つて論究考察せられたものである。